

主の 2014 年 9 月 7 日
第 86 号 創立記念号

日本キリスト教団
泉ヶ丘教会

牧師 松永政和
〒 590-0114 堺市南区槇塚台 1-1-5
TEL・FAX 072-291-9532



izumigaoka9532church
@yahoo.co.jp

■礼拝・集会■

- 主日礼拝(日)午前10時30分
- 教会学校(日)午前9時
- 聖書を学び祈る会(木)午前10時30分
- キリスト教入門講座・家庭集会
- マリヤ会・テモテ会、他

■教会標語■

『キリストを証する教会』
一手を携えて歩む一

「教会」と聞いて、どのようなことを思い浮かべますか。いつも日曜日に行っている教会。大きな教会、こじんまりとした教会。旅先で訪れた教会。様々な教会を思い浮かべます。それは建物としての教会です。「兄弟姉妹」と呼びあって一緒に礼拝を守っている人たちと「の交流を思い起こすかも。牧師のこと、聖書、讚美歌、聖餐式などが重なって思い出すかもしれません。ひっくり返して言えば、「イエス・キリストを信じる人たちがいる所」と言えましようか。「礼拝する者たちの群れ」と言う表現もあります。

「教会」の中心は建物でも集会でもありません。中心は「礼拝」です。

「教会」、それは自然発生的にできたものではありません。また人間の思いで建てられたものでもありません。凡そ二千年前、『全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。*1』とのお言葉が少しずつ、しかし倦むことなく実現していく中で、教会は全世界に広がっ



教会、キリストを伝える

ヨハネによる福音書一三章一〜十一節

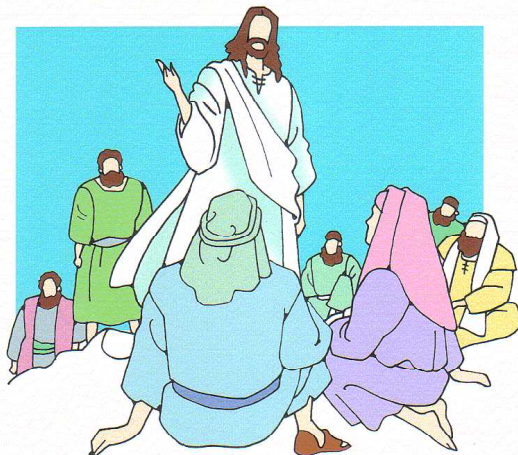
牧師 松永 政和

ていったのです。

ですから教会は、その始まりを持っていきます。長い歴史を経た世界的な教会も、ごく最近誕生した教会もみな、その始まりを持っています。「福音を宣べ伝えなさい。」という始まりです。礼拝で福音が語られなかったなら、この地に福音が語られえられなかったら、それは教会としての命が絶たれたということです。教会は、救われた者だけが集まって憩う所ではありません。教会は福音を宣べ伝える所です。

では「福音」とは何か。イエス・キリストの十字架と復活の出来事です。「十字架に架けられたキリスト」です。それは多くの人をつまずかせるもの、愚かなものですが、私たち人間の救いそのものなのです。そして「復活」です。死者の中からの甦り、一時的な蘇生ではない、永遠の甦りです。これもまた、多くの人には信じられないことです。聖書は、『キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。*2』と証言します。

イエス・キリストの復活は、私た



ち人間に永遠の命が与えられることの約束です。多くの人にとってはずまずきであり愚かなこと、信じられないことですが、キリスト教の信仰は、十字架と復活のイエス・キリストを「わたしの救い主」と信じる処にあります。そうですから『わたしは福音を恥としない。福音は、信じる者すべてに救いをもたらす神の力。*3』と確信して、キリストの福音を語っていきます。

といても、それは教会で言うあの牧師とか宣教師だけの務めではあ

りません。『全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい』とは、教会に集います者すべての人に告げられた神の言葉です。専門的な知識や話術、経験などに関わりなくです。それがたとえ拙くとも自分が受けた福音の喜びを語れば良いのです。

聖書には、初めの教会が建ちあがってすぐにも大きな迫害が起こり、信者は散り散りになったことが記されています。しかし同時に『散って行った人々は福音を告げ知らせながら巡り歩いた。*4』と証言しています。教会の歴史は迫害の歴史です。私たちが、キリストの福音を語ろうとしますなら、少なからぬ妨害、無視や迫害が起こります。真実を語ろうとする時に見られることです。

しかし、『恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。*5』と、私たちが福音を語ることに躊躇するときに、このように言ってくださいるのです。

私たちは、教会の礼拝に出席して

説教を通して聖書の言葉を聞きます。また、時に、ひとり聖書を開いて読みます。その時は何ほどのことも覚えていないことが多いでしょう。しかしそれは少しづつですが蓄えられているのです。聖書は、『御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。*6』と告げています。その上で、『御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。*7』と言われるのです。おおかたは折りが悪い時ばかりかもしれないかもしれません。それでも心配することは要りません。『何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言つべきことは教えられる。*8』とはイエスのお言葉です。

ひとつの教会が誕生します。偶然できたのも、強い人力によって生まれたのでもありません。この地に福音の種が蒔かれたのです。信じる者の熱心な祈りが種を育てていきまします。やがて神の恵みによって芽を出し、茎を育て、葉を茂らせ、教会として立ちます。泉ヶ丘教会も、そのようにして創立しました。しかしそれで完成ではありません。早速にも教会に働きが期待されます。それは、

自分たちがそうであったように、福音の種、御言葉の種を蒔くことです。そして成長するようにと熱心に祈ることです。こうして二千年來、『全世界に行つて、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。』とのお言葉の成ることを願って私たちは、今日も御言葉の種を蒔きつづけます。それは効率の悪いことかもしれませんが、新しい教会が、新しい信者が誕生することを願って、『折が良くても悪くても励む』のです。 Ω

【引用聖書箇所】

- *1 「マルコ福音書16：15」。
- *2 「ローマ6：4」。
- *3 「ローマ1：16」。
- *4 「使徒言行録8：4」。
- *5 「使徒言行録18：9」。
- *6 「ローマ10：8」。
- *7 「テモテⅡ4：2」。
- *8 「マタイ福音書10：19」。



涙



内藤 順子

ある日夕刊を開くと、一面の下段のところに「A新聞広告局は7月3日を「なみだの日」と名付けて、特集をお届けします。大人だって泣いていい。最後に『涙』を流したのは何時ですか？」と書かれて、「涙活」について。二面には、父親と娘の涙の物語。三面には涙は拭わずに流せばなしにと。…最後の四面には知っておきたい自分の泣けるツボ。多くのページに涙に関すること、物語が紹介されていました。私はこれを読んでいて先日のことを思い出していました。

母は施設のベットに横たわり、もう何も話すことも出来ず、食べること、水分補給も難しい状態になっていました。この日もただじっと見つめるだけ。私も手をとってそれを眺めている、暫くそんな状態で時間が流れました。

突然、母の目から涙が零れ落ちました。

「どうしたの？しんどいね」と話しかけながら涙を拭いているところに、職員の方が入って来られたので、「もうカラカラだと思っただけですが涙は出るのですね」と私が言うと、するとその方は「何人かの方が最後に涙を流されるのを見てきました。私はそれは、『ありがとう』と言っておられると捉えています。おかあさんはあなたにありがとうと言っておられるのですよ」と言われました。私は思わず「そうでしょうか？」と返事すると、その方は優しく母の背中をなでながら、「きつとそうですよ」と答えてくれました。二人の目は涙で一杯になりました。その三時間後に母は息を引き取りました。

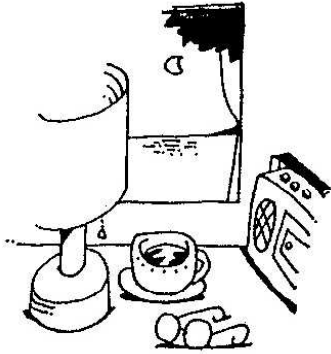
母は6月19日に、99歳と2ヶ月で生涯を終えました。



今年の4月14日の誕生日は良く晴れた日でした。久しぶりに車椅子に乗ってお庭の散歩をしました。チユウリップや芝桜、菜の花がきれいに咲き、うぐいすが鳴いていました。ほとんど無反応になっていましたが写真を撮ったり、あれこれ話しながら、ゆっくりと穏やかな時間を過ごしました。そして部屋へ帰ってプリンを食べる。これが今私のできる最大の誕生日プレゼントでした。それから母はだんだん弱っていき、寝ている時間が長くなりました。顔を見て、痛かったり苦しかったりは無く、良く寝ているとほっとして帰る日も多くなりました。後は神様にお任せして思っていました。

5月12日、施設からお電話を頂き「何か出来ることはないかとみん

なで話し合いました。以前よく教会に行かれていたので一度教会へお連れしたいのですが、ご協力いただけますか？」と相談されたので「是非お願いします」と応え、「ではこちらも検討します」とのことでした。思いがけないことで大喜びしたのですが、その翌日から様態はさらに悪くなり、5月17日の夜「看取りの部屋」に入ることになりました。建物の一番奥の部屋で和室にベッドが置かれ、片方は全面が窓で、外は一面に緑が広がる明るい部屋でした。「24時間ご自由にお使いください」と言ってくださいました。早速、カセットを持ち込み賛美歌のテープを流し聞いたり歌ったりを始めました。それに驚いたこと、施設の方針でターミナルケアの一環として



職員の方が出勤された時には、どなたも母の部屋を訪ねてくださいます。「良いお天気ですね？今日はこれから夜勤です。宜しく願います。」「はじめまして。今日からお世話させていただけます」と、何十人も人が声をかけ、さすったり、頬を寄せたりしてくださいます。こうして一週間を過ごすうちに母の様態は良くなってきました。

25日(日)午後訪ねると、顔色もよく、しっかりと目を開け私達の動く方向に目で追うようにまでなりました。何時もお世話くださる職員の方が来られて「今週、教会へ行きましょう」と言って下さるので、私は驚いて、「えっ大丈夫でしょうか？この状態が木曜日まで続くでしょうか」と言うと、「とにかくこちらも準備します」とのことでした。その夜、松永先生にお電話をして相談しました。「大切な時間です、聖餐式も考えて準備しましょう」と言ってくださいました。

5月29日(木)。ブラウス、ロングスカートでちょっとおめかしをして、久しぶりのお出かけです。施設のケアマネージャーの方の運転で、



看護師さんも付き添ってくださいました。

泉ヶ丘教会では毎週木曜日「聖書を学び祈る会」が開かれています。この日はイースターから四十日目「昇天日」でした。先生は急きょ予定を変更して「昇天日礼拝」として準備してくださいました。そうして母は、13名の方と一緒に礼拝を守り、聖餐式でパン、ぶどう酒も私と分けて頂くことが出来ました。母にとって最後の礼拝となりました。そして6

月 19 日 6 時 44 分 神様の許に召
されました。

「主はわが牧者なり われ乏しき
ことあらし」

主はわれをみどりの野にふさせい
こいの水際にともないたもう

わが世にあらん限りは必ずめぐみ
とあわれみとわれにそいきたらん、
われはとこしえに主の宮にすまん」

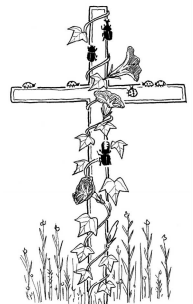
(文語訳 詩篇 23 篇)

牧者に依り頼み すべてを委ねて、
平安のうちに静かに眠りにつきまし
た。神様は、最後のときまで備えて
下さいます。感謝です。 Ω



8月に思い出す

前川 直美



私の父は広島で生まれました。

あの原爆の落ちた日、父は友達と、
川に居ました。

学校をサボり魚釣りに行ったので
す。

飛行機が見えた時 2 人はとっさに川
に潜りました。

次の瞬間、川の水はお湯になってい
ました。

川から上がった時、周りの景色は一
変していたそうです。

祖父を除いた家族 6 人が広島に居
ました。

誰も怪我しなかったのは奇跡だった
のかも知れません。

建物疎開に動員された友達はみん
な亡くなりました。

祖父が軍医であったため、スパイだ
と言われたそうです。

それほど被害が大きかったのだと思
います。

その頃のことを父は語りたがりま
せんでした。

祖母の実家の有る神戸に引き上げ
てからも、差別にさらされました。

長袖シャツを着ていると「ケロイド
が有るのでは？」と言われ、

結婚しても「子供に障害が出る」と
言われ：

時は流れ戦争は遠い出来事になり
ました。でも世界は少しも変わって
ない。

世界中で開発され、使われ続ける様
々な兵器。



兵器だけではありません。核の平和利用と言われる原発、クローン技術、臓器移植、遺伝子治療、体外受精。

科学はどんどん進歩していきます。それを「使いたい」「試したい」と思うのは当然かもしれません。人間の様々な欲望のためにつかわれる科学技術。でも、私は思います。「人間の分際を超えてはいないか？」

能力の有る人、力の有る人こそ神の御前に謙虚であらねばならないと。

「神様これを使っていいですか？これをすることはあなたの御心にかなうことですか？」



愛されている！



野々下 陽子

今回もちよつと思ひ出してみます、神様を知る前の私。周囲から認められたいな、安心して話せる友達が欲しいな、私はこれだけ頑張ってるんだから見返りが欲しいな…、言い換えると、誰も私を評価してくれない、信用できる人はいない、という心の持ち方をしていました。ずいぶん曲がった考え方も思いますが、もしかしたらそんなに珍しい事でもないのかも思いません。他の人に聞いた事が無いのではっきりは分かりません。自分の存在が不安定で、愛に飢えていつも孤独だったということですが、私は皆も自分と同じように考えているんだと思っていて、いびつな自分を顧みることな

ど思い浮かびもしないまま、自分の欲求が満たされることをただただ欲していたのでした。

当然いろいろ行き詰まり、教会で出会った人を「観察」して（他の人を見る事が出来るようになったのは変化です）、私とは違うけれどもどう違うのかもわからない、物事をどのように見てもどのように判断してどう行動するのか真似したいけど出来ない、でもここの人たちは信用できそうで私はここではゆつたり居られる、と感じながら、わからないことがもどかしく教会に行っていたのを思い出します。

神様との出会いは一人一人唯一で、神様からの眼差しに射られる時に一人一人神様との固有の関係が始まるのだと思います。聖書の他に、クリスチャンの人のいろいろな本も読み、教会に通いました。新しい言葉にたくさん出会いましたが、そのひとつにこんな詩がありました。

毎日見ていた
空が変わった
涙を流し友が祈ってくれた
あの頃

恐る恐る開いた
 マタイの福音書
 あの時から
 空が変った
 空が私を
 見つめるようになった

星野富広さんの詩です。
 もう一つ、ルカによる福音書19
 章の徴税人ザアカイとイエス様との
 出会いも、私は自分を重ねます。

『そこにザアカイという人がいた。
 この人は徴税人の頭で、金持ちであっ
 た。イエスがどんな人か見ようとし
 たが、背が低かったので、群衆に遮
 られて見ることが出来なかった。そ
 れで、イエスを見るために、走って
 先回りし、いちじく桑の木に登った。
 そこを通り過ぎようとしておられた
 からである。イエスはその場所に来
 ると、上を見上げて言われた。「ザ
 アカイ、急いで降りて来なさい。今
 日は、ぜひあなたの家に泊まりた
 い。』』

私側から見ている世界から、神様
 の側から見る世界を知らされて、イ

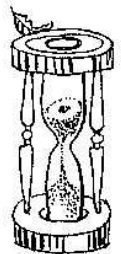
イエスのことは興味があって知りた
 いけれど、私の内面には触れて欲し
 くないから隠れて見ようとしている
 私に、神様から個人的に呼び掛けら
 れ、あなたを愛しているよ、と正面
 から言われたように思います。
 「愛されている！」これが全ての
 出発なのだと思います。そして安心
 してから、その次に進んで行ける。
 そんな風に世界を変えられてから、
 今日も神様のまなざしの中に置かれ
 ている、やっぱりこれが私の安心で
 す。



11月の旅

いのちの旅

中山 アイ子



神さまと夫との3人同行のハイキ
 ングをスイスに求めました。夫はス
 イスで亡くなり7月31日で20年
 目の召天記念日になります。思い起
 こせば、何の予告もなく天国に帰っ
 て行った日の翌日は、心の涙がこぼ
 れ落ちるように激しく雨が降りまし
 ました。

長い間、夫・宏との思い出に詰まっ
 たスイスを訪ねるのが辛く、先延ば
 しにしていましたが、やっと決心が
 着き、大切な遺骨を持っての旅とな
 りました。

スイスに着いた日から雨が冷たく
 降り、霧が立ち込め、私の心象風景
 のようなお天気になりました。主よ、



いつまでですか。私の魂は思い煩い、日々の嘆きが心を去らないのですかと問いかげながら心の旅をつづけました。
お花畑に咲く色とりどりの可憐な

花が美しく、その優しさに心が癒されました。アルプスに活気が戻る夏山シーズンの到来です。アルプスの懐深くまでロープウェイやゴンドラで上がったあと、いきなり素晴らしき展望のなかでハイキングが始められるというのは、アルプス・ハイキングならではの醍醐味です。冬の寒さから解放された牛がのんびりと草を食み、カウベルの音を快く響かせる情景に、20年ぶりにスイスを訪れたという実感で胸が熱くなり、こころのふるさとに帰ってきたような懐かしい思いがしました。
アルプスでの森林上限は1800〜2200mで、それより上は高山植物の世界になり、パツと開けて明るくなります。日本の高山のようなハイマツ帯はここにはなく、広々とした台地状の草地の緩斜面が展開していて、これをアルプといいますが、アルプは日当たりがよく、大きなお花畑にキンポウゲやマウンテン・ローザなど色彩の華やかな花が群生して咲いています。7月下旬になると晴天の日は増えますが、花の盛りは下り坂となっていくます。背景に雪を冠した4000m以上の峰々が聳

え、前景には赤や紫、黄色系統の花が咲き乱れるアルプの情景は、まるで絵葉書のような世界でした。

スイスには白く輝く氷河が数えきれなくあり、世界遺産のアレッチ氷河やゴルナー氷河などが、とうとうと流れていて、大河のようなうねりを感じさせながら目の前まで迫ってきます。近年は地球の温暖化の影響で、年々小さくなってきていますが、スイスの美しい自然がこういう形でなくなっていくのは悲しいです。

ゴンドラを乗り継ぎグレッシャー・パラダイス(3883m)の長いトンネルを抜けて氷河雪原に出ると、雪がちらつき厚い雲にすっぽり覆われて全く見えませんでした。ここから20数年前に、夫とブライトホルン(4164m)に向かって氷河雪原を歩き始めた記憶が甦ります。ここからはアルピニストの領域に入り、ピッケル、アイゼン、ザイルなどが必要となり、少しずつ標高が高くなるにつれ、高度の影響が始め眠たくなり、頭も痛くなるという高山病の症状の体験もしました。
天気はいつこうに良くなり、雨

が降る寒い日が数日間続きました。諦めつつも、でも祈るような気持ちで、孤高の山・マッターホルンとの再会を祈りました。突然覆っていた雲が少しずつ消えていき、全身に日光を浴びた高貴な恋人が慄然と目の前に現れ、マッターホルンの巨大な石の立像と向い合った時は、おおよそ言葉にならないくらい感動を覚ええました。きっと神さまの贈り物です。こころに深く沈み込んでいた闇も少しずつ消えていくように思いました。

思い出深いチエルマットの教会を訪ね、山で逝去された名ガイドたちが眠っている教会の脇の墓地に立ち、絶望のどん底を彷徨い、途方に暮れ、たくさんの涙を流した辛い思い出がこみあげ、夫の最後の言葉を聞けなかったことが特に辛かったです。旅の大切な目的は、お花に囲まれ神々しく輝くマッターホルンや登攀した思い出深い峰々に抱かれながら、安らかに眠ってほしいという夢がかなえられることです。私の思いをはるかに超えた神さまのみ胸にお委ねしますと静かに祈りました。



スイスで一人残され悲嘆にくれ、深い孤独にいる私を抱きしめ慰めて下さり、言葉では言い表すことの出来ないほどお世話になった西永さんご夫妻（ドイツ語・フランス語・イタリア語・日本語を話されるスイス人の奥様には特別にお世話になりました）を訪ねましたが、生憎イタリアに御旅行中でお目に掛かれませんでした。2日後に心のときめきを覚

えながら再度お訪ねしお会いすることが出来ました。助けて頂いたあの時のことが走馬灯のように思い出され、懐かしく、心の高ぶりを抑えるのに必死でした。

マッターホルンは魔物の棲家と恐れられていた時代に、E・ウインパーはマッターホルンに初登攀し、常宿としていたホテル・モンテ・ローザも昔のままでした。

ゴルナグラートから少し下り始めるとすぐ右下に「逆さまッターホルン」で有名なリッフェルゼーが見えてきます。風もなく、湖面に逆さまッターホルンの孤高の姿が映りだされ、息が止まりそうなほど美しい眺めに、天国ってこんなところかなと想像しました。すぐ下にもう一つのリッフェルゼーがあり、リッフェルホルンがすぐ隣にあるためか風の影響が少なく、水面が鏡のように静かに、「逆さまッターホルン」が湖面に映し出され、絵葉書のような美しさです。リッフェルホルンは、マッターホルンに登るクライマーたちがマッターホルンと岩肌や岩質がよく似ているからとロック・クライミングを練習する山です。夫はスイス人

のガイドさんとマッターホルン登攀に備え、ロック・クライミングの練習をし、あと少しで終わるといふ時に息が絶えました。どうしてこんな美しい状況の中でと絶句しました。湖面にリッフェルホルンが影を落とすしていました。静寂が周りを取り囲み時間が止まったかのようです。

リッフェルホルン(石の下にそっとお骨を埋め、神さまに祈りました。「わが神、主よ、かえりみて私に答え、私の目に光を与えて下さい。貴方の慈しみに依り頼みすべてを委ねます。悩みも苦しみも、主イエスが共にいて下さるのですからやがて消えていき、平安でありますように」マッターホルンは飛び抜けて美しく、高貴さを兼ね備えていて、その孤高の美しさは喩えようがありません。

夫の最後をスイスに結び付けて下さった神さまの恵みを感じつつ、刻々と姿を変えるマッターホルンの山容を眺めながらゆっくと、振り返り振り返りお別れしました。

旅の初めから終わりまで共にいて下さり、私にとって大切な、大きな宿題を、平安のうちに無事遂げさせ

て下さった神さまに、恵みを心から感謝しています。
Ω



(2014年7月14日 写す)



恵みの夏期学校

時武 哲也

今年も堺川尻教会との合同の夏期学校が8月19日(火)から二泊三日で行われた。毎年信太山青少年野外活動センター(和泉市)で行われていますが、今年は貝塚の大阪府立少年自然の家に場所を移し行われた。

今年のテーマは「教会、大好き」、聖句は「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」(聖書箇所 使徒言行録 3章6節と決まり、堺川尻教会で準備を進めてこられた。具体的には使徒言行録から「パウロの回心」について学び、考えていく分級が持たれた。

今年には様々な事情で泉ヶ丘教会からの子供達の参加は適わなかったが、泉ヶ丘教会から私を含め3名がスタッフとして堺川尻教会の夏期学校に参加させて頂いた。今年も堺川尻教会との合同の夏期学校を神様が備えて下さったこと心より感謝します。

私は2日目の朝、大阪府立少年自然の家へ向かい子供達と過ごすときが与えられた。午前中は分級の時間、私は途中から小学3、4年生のクラスに加えて頂く。グループに分かれてパウロの生涯の一場面、一場面を絵に描き、一冊の絵本にしていくそうだ。私は男子グループのテーブルへ。このグループの子供達はパウロがダマスコ途上でイエス様にお会いした場面をどう表現するか懸命に考え、悩みながら書き進めていた。一人ひとり自分なりに感じたパウロ像や周りの人物をよく表現したなど感心させられる。各グループで描いた絵を、一枚、一枚順番に張り付けていく。神様のご計画によってイエス様と出会ったパウロの生き方は、180度変えられた。一冊の絵本としてパウロが主の御心を知り主と共に

歩みぬいた姿がよく描かれていて、各スタッフからも思わず拍手。パウロがイエス様と出会ったように、子供達一人ひとりがパウロの姿、歩みを学ぶ中でイエス様と出会えるようにと願う。

午後の縦割り分級では、リーフラー&アスレチックコースに参加した。一つ一つ進め方を考え、よく準備されている。まずは各チームに分かれて「葉っぱ」探し、リーフラーのスタート。チームごとに違った8枚の葉っぱをみんなで協力して探し当て山道を進んでいく。探検感覚で大自然に触れ、あと3枚、あと2



枚になってからありそうでなかなか見つからない。いったんコースを後戻りしてもう一度再探検したり：：ようやく”難関探検”を無事？終え、続いて森の中を進み自然の中の木材を利用したアスレチックに挑戦。みんな笑顔で生き生きと楽しい時を過ごした。アスレチック以外にも、神様が創造された自然の中には子供たちの遊び道具が溢れている。めいっぱい遊んだ後は、自分たちの部屋に戻り一息、身体を休めた。

さあいよいよ野外炊飯だ!! 10何年ぶりの貝塚での野外炊飯、うまく出来るかな?メニューはもちろん定番のカレーライス。7つのグループに分かれて、それぞれ小さな子供達から小学校高学年や中高生、それにスタッフも加わり、野菜をむいたり切ったり、お米を研いだり、マキに火をつけたり分担して進めていく。小5の男子と私が火おこし担当。ご飯を炊き、肉に火を通し、続いて子供たちが一生懸命作ってくれた野菜を大きなお鍋に入れていく。火力の調節がなかなか難しい。どのタイミングでマキを追加するか、熱さと匂いをつつ燃えるマキとにらめっこ。最

後にカレーのルーを入れてフィニッシュ。ちよつとサラット感が気になるけれど味はどうかかな?他のグループでもご飯とカレーが続々完成。さてお味は：みんなで心を込めて作ったカレーライス。神様に感謝しお祈りして頂いた。やっぱり最高!! 本当に美味しかった。

前の日は初日で夜中も話が盛り上がり、今朝は睡眠不足の子供達もチラホラ。でも今晩はゆっくり眠れるね。明日は最終日。明日も主に祝福された一日となりますように：：と祈りつつ家路に着く。

夏期学校が終わった翌日、堺川尻教会より主の豊かな恵みのうちに終了しましたと連絡があった。主がすべてを備え導いて下さった恵みの夏期学校。来年は泉ヶ丘教会からも子供たちが参加出来ますように。



いくつかの祈り

岸本 眞



通勤途上の車中から毎日のように見かける風景があります。まだ働き盛りの壮年男性の、毎朝の出勤前らしき風景なのですが、その方は自宅玄関を出ると、車の往來が激しく騒がしい道路に面している自宅前にも関わらずそこに設けられた小さな祠(ほこら)に向かっておもむく合掌し、頭を垂れて一礼した後顔を上上げ、すがすがしく駅に向かって歩き出されます。私はその風景をいつも傍観しています。私にはその方の信じる対象が何なのかは知るよしもないのですが、その方の礼節に対しては、信仰や主義主張を越えた自然な畏敬の念が浮かんできて、すがすがしく仕事場に臨むときとなつてい

ます。

晩夏より、夜明け頃に漂う季節の移いを漂わせる靈気に似た気配を吸いたくて、出勤前の早朝に短い散歩を始めています。いざ散歩し始めると、毎日お見かけするお馴染みの顔々が増え、さすがに気むずかしい私でも会釈して行き交うことになりました。そんな散歩道に、毎朝見かけるこんな風景があります。

初老の男性なのですが、ご自分で飼っている二匹の犬をリードで繋いで散歩させているのですが、いつもいつものところに来ると決まって地面に伏すや、茂みに隠すように置いていた缶を取り出します。そして持っている袋から餌を取り出してそれを入れると、どこからか数匹の野良ネコが待っていたかのように集まってきてその餌を無心に食べ始めます。私は、その方の自分の飼っている犬の散歩とその途中での飼い犬への朝食なら微笑ましく思うのですが、飼うことを放棄しているのに野良ネコにまで餌を与えるその行為は、少し無責任ではないかと、善良な住民ぶつて毎朝少々憤慨していたのですが、

あるときその人が黙って彼らに餌を与えている風景を遠くから眺めていてふと思いました。

その風景は、神さまが私たちに「一日の苦勞は一日にて足れり」と、毎日の衣食や健康というマナ与えて下さっていることとどこか似ているのではないかと。少なくとも私は野良ネコではないけれど野良人かも知れないなと思えると、その男性が野良ネコたちのその日の命を繋いでいる行為は、公序良俗の規範だけでは裁けない、その男性の祈りに似た（確かに無責任だけど！）何やら温かい思いがわかるような気がしていました。

私の職場は、非常に重い障害を持たれた方々が入所されている施設であり病院です。保護者の方々は一緒に暮らしたいけれど障害の深刻さや介護負担など様々な理由で入所に踏み切られていきます。私は一日の終わり頃に入所者の方々の居室を巡回するのですが、ベッドごとにおられる方々の安らかなお顔と目が合うたびに、今日一日の命を守って下さった

神さまに感謝して祈り、帰宅します。

二人の子供達はやっとなんとか一人前の社会人になり、家を出たので、毎日の夕食は夫婦二人だけ（子供達がいっても同じでしたが）となりました。

私たち夫婦がそろって祈る機会は、子供達が巣立つ前の元旦礼拝の朝以外には恥ずかしながら夕食前しかありません。仕事を終えて一日の疲れ





しかし私たち夫婦は「主イエス・キリストの御名によって」祈ります。石の神仏でもなく、生きとし生けるものへのいとおしさから自然に沸い

た心と体を引きずったままの二人だけの食前の感謝の祈りになります。祈りはその日一日の健康が守られたことへの感謝に続き、遠方にいる母への慰め、親しい方々の健康への癒やしと励まし、そして世界中の病や争い、飢餓の中にいる人々への暖かな夕餉と安らかな眠りと健やかな目覚めが与えられることへの取りなしを祈ります。夫婦げんかしている最中は口ごもってなかなか素直に祈れませんが、それでも神さまは祈ることを笑って強いられますのでしかたなく祈ります。

てくる動物愛や人間愛や社会愛でもなく、私たちの神さまは「主イエス・キリストの御名によって」祈ることを求められるからです。

そしてその祈りは、気分のいいときでもなく、辛いときだけでもなく、祈ろうと思ったときでもなく、祈らずにいられないからでもなく、ましては夫婦げんかしているときも、パウロは「絶えず祈りなさい」(第 1 テサロニケ 5・17)と勧めます。「主イエス・キリストの御名によって、絶えず祈りなさい」と。

しかし、正直これはきついです。自分の都合で祈れないからです。祈る気分でないときも祈らないといけないからです。だからこそ、神さまは「主イエス・キリストの御名によって、いつでもどこでも祈り求めなさいなさい」と言ってるんだと思います。だからきつと祈りは「祈る」んじゃないなくて、サムエルのように「主よ。お話しください。しもべは聞いております。」(サムエル記上 3・9)と「聞く」ことなんだと思います。爽やかな早朝の散歩の途中で心静まって穏やかなときも、痛みや憎しみや苦しみの中であって神さまの声

が聞こえないくらい心が騒がしいときも、他の何でも誰でもない、主イエス・キリストの御名によって、絶えず祈り求め聞き従う、泉ヶ丘教会の枝であり、その教会に繋がるしもべ夫婦であれたらと願います。まだ夫婦げんか中ですが…。

浅い流れは音がたかい
わたしの祈りよ
言葉よ 行いよ
音がたかくないか
深い流れは音を立てない

グレース神戸バプテスト教会
河野 進 牧師

Ω



誇る者は

主を誇れ

コリントの信徒への手紙二

十一・十七

いづみ